

## 韓国薬学研修報告 ～漢陽大学付属病院見学～

中村 真未

薬学部6年 08A801

韓国研修2日目の9月9日、漢陽大学薬学部のイジュン教授引率のもと、漢陽大学付属病院薬剤部を見学させて頂いた。

漢陽大学付属病院は41年前に設立され、膠原病・リウマチ科で有名な病院であり、ソウルキャンパスの裏に位置している。現在800床を有し、心臓や肝臓の移植も行われている。薬剤部では現在27名の薬剤師が働いており、一般的な疾患からリウマチや移植患者という特殊な疾患に対する様々な医薬品を扱っている。扱う処方箋枚数は3500枚/日で、その内訳は多くが入院患者さんの院内処方箋である。外来患者さんにおいては、院内調剤は障害のある患者さんや移植などの特殊な患者さんに対して行うことがほとんどであるという。医薬分業は韓国でも進んでいるようだ。

薬剤部は広々としており、外来用調剤室、院内用調剤室に分かれていた。外来用調剤室は窓口と連結しており、日本と同じくパネルに表示される番号で患者さんに薬を渡すシステムであった。院内調剤用の調剤室は、錠剤、散剤に区画が仕切られており、ほとんど日本と変わらなかった(図1,2)。

日本と同じく、一包化処方が多く、自動分包機が数台

設置されていた(図3)。一包一包には患者さんの名前と薬の種類・数、用法と患者個別のデータを読み取るバーコードが印字されていた(図4)。バーコードによって薬の受け渡し間違い等の調剤過誤を防ぐための工夫がされていた。これは一包化処方が多い象徴であると言える。

注射剤は病棟ごとに揃えられ、各病棟へ上げられていた。薬剤部では、午前は抗がん剤調製、午後はTPN調製が行われている。実際に抗がん剤調製を見学させて頂いた(図5)。帽子、保護メガネ、手術用ガウンの着用などの安全対策は日本と同様であった。手袋は三重に着用されていた。調製後の抗がん剤(今回見せて頂いたのはガラス瓶)の口部分には赤いテープで印をつけ、調製済みであることがわかるようにされていた。ほとんどはビニール製の輸液だが、ガラス瓶の医薬品も使用されているのは興味深かった。遮光袋にも、調製後の抗がん剤にも患者さんの氏名とIDが書かれたラベルが貼られ、外来患者さんの元へ送られていた。

注射剤調製、散剤など、薬剤師が担当する部署は固定性ではなく、1~2カ月毎のローテーションで行われているという。



図1 調剤室



図2 散剤用調剤室



図3 自動分包機



図5 抗がん剤調製

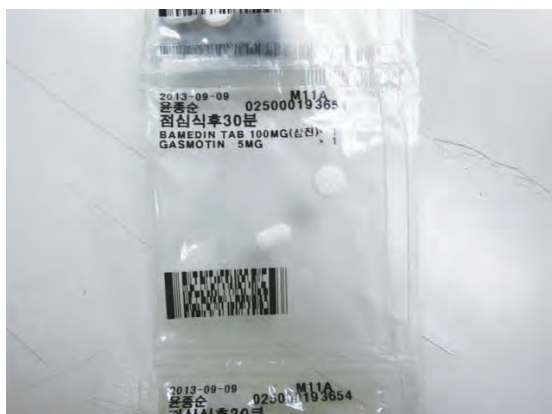


図4 バーコード



図6 地域医薬品安全センター

漢陽大学付属病院では免疫抑制剤の使用が多いため、TDMも多く行われている。TDMは一人の薬剤師が担当しているという。2013年8月の一カ月間では96件のTDM依頼があったということから、TDMは薬剤師が活躍できる場であることは変わらないようだ。漢陽大学付属病院は、地域医薬品安全センターとして国から指定を受けている韓国内22施設のうちの一つである。地域医薬品安全センターでは院内のみならず他の医療機関で発生した副作用管理を行っている(図6)。毎月、数々の医療機関から副作用報告が届けられ、その件数は約500件/1カ月にもなるという。

漢陽大学 ERICA キャンパスに薬学部が設立されたため、来年からの学生実習受け入れのために新しい施設の建設中であった。韓国の薬学部は4年制から6年制に移行して3年目であり、現在の5年生が最高学年である。日本では5年生で実務実習を行うが、韓国では最終学年の6年生で実務実習を行う。病院実習が10週間、薬局実習が5週間、製薬会社での製品管理での実習が3週間あるという。韓国では病院・薬局のみの日本の実習プログラムよりも、期間は短いがより幅広く勉強できる実習

プログラムとなっている。病院での10週間の実習では、科目として病院薬学Ⅰ・Ⅱの内容が実習に当てられる。内容は調剤、服薬指導などの病院業務全般、抗がん剤調製、TDM、NSTなどの医療チームについて学ぶ等、日本の実習内容とほぼ変わらない。しかし、漢陽大学付属病院では移植などの特殊疾患を扱っているため、そのような特殊な疾患について学ぶことも実習プログラムに組み込まれているという。このような大病院で幅広い疾患について学ぶことは、薬学生にとっては非常に良い機会だと思った。

今回の韓国研修では、大学病院見学に加え、実際の薬剤師から話を聞ける貴重な機会を頂いた。実務実習を経験した後での研修だったため、日本の薬剤師と薬学部との比較をしながら研修に臨むことができた。より見聞を広めることができ、良い経験となった。今後も漢陽大学との交流が続き、お互いが両国の良いところを学ぶ良い機会になることを願っている。